

世界が若者に生を促すように詩作する人

亜久津歩第一詩集『世界が君に死を赦すから』に寄せて

1

亜久津歩さんの詩には、今を生きる若者たちの生死をかけた肉声が世代を超えて伝わってくる。そんな身を切り血が吹き出るような痛切な言葉を読んでみると、いつの時代でも詩が必要な若者たちがいて、宮沢賢治の『春と修羅』のようにその時代の切実な「修羅」の言葉が若者の詩として結実されることが分かる。新しい詩、はその時代の世界の苦悩を背負った真摯で鋭敏な若者たちから生まれるのだ。

亜久津歩さんと初めて会ったのは、二〇〇八年七月十九日の「浜田知章さんを偲ぶ会」であった。浜田知章さんとは鳴海英吉さんから一九八八年に紹介されてから二十年もの付き合いをさせてもらった。浜田さんは二〇〇七年に発刊した『原爆詩一八一人集』の編集の根本的な思想である「ヒロシマの哲学」を提唱された偉大な詩人であり、詩の運動家であった。私はそんな敬愛する詩人を亡くして悲しくて仕方がなかったのだが、悲しんでいる間もなく、忙しく「コールサック」六一号の追悼号や『生活語詩二七六人集』などの編集に追われていた。その偲ぶ会が開かれる一週間前に亜久津さん

からメールが届いたのであった。広島・福山の詩人大山真善美さんの紹介だといい、書き溜めた詩作品を読んで感想を聞かせてほしいとのことだった。六月後半にたまたま大山さんが上京した際にコールサック社に遊びに来た。大山さんは昨年発刊した『原爆詩一八一人集』英語版の四人の翻訳者の一人で、

靈感の強い大山さんは翻訳最中に被爆者の霊が現われてきてとても難儀をしたそうだが、持ち分の翻訳をやり遂げてくれた尊敬すべき詩人で翻訳者だ。そのときの思い出を語り合い帰り際に明日は、亜久津歩という親しい若い詩人と会うために一日帰るのを延ばしたと聞かされた。私はその詩人へと「コールサック」誌の最新号と出たばかりの女性詩人の詩集を贈呈するように手渡した。しばらくしてそのことが機縁となって亜久津さんからメールがあった。コールサックの詩の運動の同志であり、私の大切な人を亜久津さんと一緒に偲んで欲しかったことと、また全国からやってくる詩人たちに接して欲しいという願いを込めて、その会に参加することを勧める連絡を私は取った。当日亜久津さんは参加し、手伝いもしてくれた。三次会で話すことも出来て彼女の作品も手渡された。そして後日亜久津さんとはコールサック社にやってくるまで語り話すことができた。私は亜久津さんの話を聞き、稀にみる詩的精神の持ち主だと感じた。その詩に賭ける情熱には亡くなった浜田知章さんや私が出会った大物詩人たちの若い頃を想像させるような底知れないものを感じた。一読した詩篇

にも浜田知章さんと同様に詩で世界や人間の真実を語りつくりたいという激しい詩的衝動を感じた。またリアリズムの詩の中にも世界の苦悩を背負わざるを得ない自己を超えていく他者を励ます視点があつた。現代詩をほとんど読んでいないにもかかわらず、現代詩の抱えてきた課題を無意識に知っており、今の詩の状況を越えていける何かを身に着けている予感がしたので。一番驚いたことは、時代を本来的なものに変えていきたいという、純粹な直観力や粘り強い思索が出来る高い志を備えていることだった。そんな話の中で私は、亜久津さんの詩作活動や詩集作りを応援しようと思うようになった。

また亜久津さんは「コールサック」の詩運動やコールサック社の出版活動にも強い関心を持つようになって、正式に勤めている会社を辞めて九月からコールサック社に入社することになった。入社前にもイラストが描けるというので『生活語詩二七六人集』の全国九地区のカットイラストを描いてもらった。そのイラストは江戸時代の北斎の版画を髣髴させるタッチで、目的に適応できる自在な才能を感じた。亜久津さんは詩人としてだけでなくブックデザイナーとしても成功するだろうと私は考え始めた。そしてコールサック社のスタッフ兼ブックデザイナーとして仲間を迎えたのだ。先日刊行した『福田万里子全詩集』の福田万里子さんや、広島の上田由美子さん、府中の安永圭子さんなど画家で詩人である人たち

と同タイプのようにだと思われる。今回の詩集の装丁画も自分で描いたが、装丁のイメージの打ち合わせをしていて、亜久津さんの詩には暗闇からドアを開くと光が漏れてくるようなイメージが感じられると私が言ったことをヒントにして、あの群青の闇の部屋に光が溢れてくる絵を描いた。仕上がった絵を見て私はムンクの橋の上で両耳を両手で押さえた有名な絵「叫び」を初めて見た時のような衝撃を受け、今の時代の若者たちの内面を闇と光で描いた優れた作品だと感じ入った。

2

亜久津さんの詩集『世界が君に死を赦すから』は五十四篇の詩からなっている。その中で冒頭の序詩「遺してゆく日々」は、肉親の死を直視して、その体験を存在論的な問いにまで高めて、結果として今の家族や人間関係の希薄な時代の問題点を抉り出す優れた作品だと感じた。

遺してゆく日々

「人の死に際」は不思議な感覚だった。

重いようで、浮遊している。

病棟の中は複雑な匂い。

不安や、崩落した日常の破片、

諦めは哀しいものと穏やかなもの、
着実な「終り」の空気。

つるつるの床は、とても平らには見えない。

祖父が息を引き取ると、

死が、薫り始めた。

小さな病室はすぐに浸される。

祖父の息が止んだ瞬間、

つまり最後の一呼吸を見た。

八十三年生きた人の、一番最期の息。

人間が死んだということ。

死こそ、生々しいものなのだなと思った。

（遺してゆく日々」前半部）

この祖父の臨終に立ち会うことから始まる詩篇は、亜久津さんにとって「祖父の死」によって時間も空間も意味を変え、自分もまた変えられる瞬間に立ち会ったことを正確に伝えている。「死が、薫り始めた」瞬間を書き記そうとする。地上に留まろうとする祖父の闘いが終わり、祖父の魂が地上を離れて浮遊する瞬間を目撃したのだ。その中有の時をはずさずも描いてしまった。そして葬儀の前に祖父の遺体と語り合う殯の時間を亜久津さんは体験し、それを記したのだ。「祖父の死」

によって今まで意識していなかった祖父との血の繋がりを意識させられた。「祖父の死」は、今まで「死」を抽象的に考えていた自分に対して、本当の「人間が死んだこと」の「生々しいもの」を感じさせた。「八十三年生きた人」の存在が無くなることの痛切な意味や、「一番最期の息」の厳肅さを教えられたのだ。

自分は泣いたりなんてしないだろう。
あまり想い出も接点もないし、
あまり好かれていない気もしていた。
それでも僅かな記憶と、
もう出なくなった声で、
歩。と呼ばれた事実が、
どうしようもなく喉を詰まらせた。
ただ、この痛切で、
でもどこか温かい感情には、
抗わなくてよいのだと思った。
今は泣いてよいのだ。

少しずつ落ちてゆく体温。
それでもまだ、やわらかかった。

短い髭が点々とした、

しっとりとした頬に触れてみた。

私と、おじいちゃん。

きつと最も近いひとときだった。

（遺してゆく日々」の中間部）

今までそんなに親しみも感じていなかった「祖父の死」に立ち会い、固有名を持ち、自分と血の繋がりがあり、「一番最期の息」を見てしまった亜久津さんは、その圧倒的な人間の生の燃焼を直視するほかなかった。「歩。と呼ばれ」なくなった現実を前にして、「歩。と呼ばれた事実」が想起されてきて、「どうしようもなく喉をつまらせた」「死」とは応答のない一方的な関係の切断であることを知らされたのだ。けれども「祖父の死」に亜久津さんは、なぜか「温かい感情」を抱き始めるのだ。人間が生き物である限り死ななければならぬ厳肅な自然の摂理を前にして、「祖父の死」を通して生きる本当の意味を教えられたことだったかも知れない。様々なメディアの情報ではない、人間が生きるために本当に必要な情報を得たのだろう。だから祖父の頬に触れて、「私と、おじいちゃん。／きつと最も近いひとときだった。」という詩行には、人間の儂い命が最期に手渡すリレーのような温かさを感じたのだ。

ステレンレスに飛沫

緑と黄色のスポンジ
冷蔵庫のあくび
換気扇も寝起き
焦げついたガスコンロ
錆びついたフライパン

庭に鈴蘭、月下美人
裏の畑のホウレン草
神社で拾った銀杏が
小さな双葉をつけた

天井を映す鏡と
壊れた充電器と
余った掛け布団

並ぶカセットテープ
靴箱の奥のシューズ
閉じたままのピアノ

（おかあさんが家を出たあとと）

（おじいちゃんはきつと）

（くしも）

夕食の時間
伸びゆく影
八月の匂い

鴉が鳴いても、帰れない。

〔遺してゆく日々〕最終部〕

祖父を葬った後に、祖父の遺していった日常生活の跡を記すことが、亜久津さんにとって詩行に転化されていく不思議さを感じさせてくれる。祖父の生活の痕跡によって生々しく祖父の存在感が立ち上ってくるのだろう。不在によって逆に祖父の存在感が増してくるのだ。この場所に戻り再び当たり前前の生活を始めたかった祖父の思いが溢れ出てきて、「祖父の死」をリアルに実感している亜久津さんがこの場所にいることがよく分かる。「鴉が鳴いても、帰れない」祖父に乗り移って、祖父の視線でこの場所を見ているような親密感を讀むものに与える効果がある。亜久津さんは、祖父の力を借りてこの詩を書かされたと思つたろう。優れた詩とは、このように自己を超えて大いなる他者によって呼びかけられる瞬間に生まれてくる。きつとこの詩は亜久津さんの代表的な作品になるだろうと思われる。

働き、心身とも壊れかけた極限の体験を記している。「第四步」は、極限の疲労から部屋に閉じこもり、試行錯誤しながらも癒しの時間から命が再びよみがえってくる様を描いている。「第五歩」は、冷静さを取り戻し疾風怒濤の時間を振り返りながら表現者としての自覚を確認していく姿だ。そして最終章は、自分が愛するものを葬ったことの痛みを抱えながら、もう一度生きることを確認し、いつかもう一度新たに産みなおしたいと決意していくのだ。「第一歩」の詩集題の詩「世界が君に死を赦すから」を全行引用してみる。

世界が君に死を赦すから

もつともらしい価値や望みも
剥がしてしまえば単なる飾り

「世界」は君に死を赦す
綺麗事ならもういいよ

死んでは「いけない」の意味で
繋いでみせて、神を乞う人

「世界」が君に死を赦すから
今夜も私は破戒をうたう

——いいかい、これから勝手を言うよ
私は君の死を許さない

第一詩集『世界が君に死を赦すから』は、二十一世紀初めの日本で、若き詩人が誕生してくる痕跡を濃厚に刻んでいる。亜久津さんの詩篇には、詩人に相応しい様々の要素がちりばめられている。一人の詩人が誕生してくる軌跡は決して幸福なものではなく、苦渋や苛立ちを抱き、過剰なエネルギーで集中した仕事や恋愛がうまくいかずに、衰弱し自死に傾いたり、近親憎悪や劣等感に苛まれたりする。そんな負の挫折経験が殺到した後に、詩という表現力によって再び生き直そうとする、人間の不屈な内面のドラマを伝えてくれている。宮沢賢治は二十七歳頃に『春と修羅』をまとめ、独力で出版した。亜久津さんも今その年齢で、前に触れたように詩集を熱烈に出したいという願望を持つて私の前に立ち現れた。自己の存在の全てを込めて書き上げた詩篇は、亜久津さんの原点となるだろう。詩集の構成は第一歩「世界が君に死を赦すから」、第二歩「あざやかなる日々」、第三歩「神の玩具」、第四步「群青の部屋」、第五歩「うつくしい、世界」、現点「このわたし。の遺書」の六章からなっている。章を「歩」とするのは亜久津さんのこだわりだ。「第一歩」では一人の二十代の若者が同世代の若者たちへ生を促すメッセージがある。「第二歩」では、亜久津さんの恋人との出会いと別れを書いた赤裸々な詩篇だ。「第三歩」は都市の職場で過労死になりかけるまで

絶対に許してやらない
何の事情も、関係ない

死なないでくれますように
祈りは誰かにとどくのかい
誰かが叶えてくれるのかい
私には、君に頼むほかない

君よ死なないでいて
死なないでください
死なないでください
足りないの
もつともつと願うから

生きてください。

この詩には、自殺願望を抱く同世代の若者たちへ、生きなればいけないことを絶対命題のように語りかける、亜久津さんの同世代への深い愛情が込められている。この愚直な誠実さが誰にも代えがたい亜久津さんの詩の特徴を伝えている。遊びがほとんどないメッセージだけで成り立っている詩だ。暗喩を偏愛する先輩詩人たちからはこれは詩ではない、という先入観の入り混じった評言が聞こえてきそう。しかし私

は、この荒削りでストリートな言葉こそ十代・二十代の若者にどうしても届けようとする亜久津さんの試みであると評価したい。

これからはむしろ戦後詩の歴史的な代表作さえ全く読まない若い詩人たちが続々と詩の世界に入ってくる時代なのだと考えたほうがいい。年間三万人もの自殺者が出ていると言われてから久しい。最近では若者たちの集団自殺も現実化してきて、痛ましい報道が続いている。実際はその数倍もの悲劇を引き起こしているだろう。そんな生きていくことに絶望し死のうと思っている人間に対して伝える言葉はないのか。同情や哀れみでなく、亜久津さんはただ「生きてください」という強い願いだけがその人を死の淵からこちら側に引き戻せるのではないかと考える。さらに「私は君の死を許さない／絶対に許してやらない」という。人は自殺をするために生まれてきたのではなく、決して自殺をしてはいけないのであり、自殺を肯定して何かを伝えようとする虚無的な行為を拒絶してくれと迫っていく。そして「生きてください」というメッセージが世界にはあまりにも足りないのではないのか。「生きてください」という願いが足りないのは「世界が君に死を赦しているから」だ。そんな虚無的な世界であってはならないのではないかと亜久津さんは考えている。世界は一見ヒューマニズムの言説に満ちているが、実は自殺者を肯定する冷酷な世界であることを見抜き、人間を勝者と敗者に分けて敗者

に死を宣告させる世界であることを知っている。そんな死に急ぐ人間生み出す世界を変えることはできないか。共に自分たちと一緒に「生きてください」と共生のメッセージをストリートに粘り強く伝えていく世界の在りかを問うているのだ。

亜久津さんたちの若い世代はゼロ年代とも言われ戦後の高度成長もバブル時代も知らないし、二十一世紀初めの世界の中で没落していく日本の殺伐とした現在しか経験していない。そんな若者たちの表現者として、亜久津さんのような生と死を真正面から問うてくる二十歳の詩人の出現は必然的なものだと感じられる。浜田知章さんから戦後詩を担ってきた詩人たちが亡き後に、これから多くの若い詩人たちが詩の世界に新しい息吹を吹き込んでくる予感がする。そんな今の若者を代表する詩人として亜久津さんの詩篇を世代を超えた多くの方に読んで欲しいと願っている。詩集の最後の詩「ラヴコール」の最後の詩行を引用し小論を終えたい。

《世界》が、あたしを選べばいいのに。

《世界》が、あたしを愛せばいいのに。

あたしが《世界》を、愛するように。